

## 日本大学のガヴァナンス不全の背後にあるもの

— 教職員組合員から見た田中英壽理事長体制の10年 鈴木志郎（日本大学教職員組合員）

【特集】この自衛隊を憲法に書き加えてよいのか

## 何もできない“安倍外交”と憲法に自衛隊を書き込む危険

半田 滋（東京新聞論説兼編集委員）

## 9条改憲要求と日米指揮権密約 末浪靖司（ジャーナリスト）

## 変貌する自衛隊がもたらすもの

池田五律（戦争に協力しない！させない！練馬アクション）

### 基地レポート

#### 入間

小川満世（ストップ入間基地拡張！市民の会 共同代表）

109 / 三沢

中屋敷泰一（青森県平和委員会代表委員）

#### 岩国

吉岡光則（山口県平和委員会会長）

## 父・火野葦平と戦争と平和と

玉井史太郎（北九州市わかまつ九条の会代表、火野葦平旧宅「河伯洞」管理人、火野葦平3男）

### ●巻頭言

いまこそ非核・不戦のアジアへ 三浦一夫（ジャーナリスト） 13

## 【対談】安倍政権を揺さぶる市民と野党の共闘



醍醐 聰

(東京大学名誉教授、森友・加計問題の導引きを許さない市民の会代表)



宮本岳志

(衆議院議員、国会で「森友学園問題」を最初に追及)

## 謎の三里塚防空壕

——侍従小倉庫次の日記に見る

中小路純 (日本史)

## 全体主義に抗するために

——フランクフル、ケストナー、アーレント

池田香代子 (ドイツ文学翻訳家)

## 「あたいはやっちよらん」

——原口アヤ子 91歳の叫び

入江秀子 (作家)

## アメリカ映画の「暴力」性

——時代を映す「鏡」としてのハリウッド映画

岩本裕子 (アメリカ黒人女性史)

## 原子雲はいかにしてできたか

矢ヶ崎克馬 (個体物性)

## 〈研究ノート〉 ICT革命の新段階、劣化する資本主義

——21世紀資本主義論のための問題提起として 友寄英隆 (経済研究者)

# 祖父江昭二著作集『久保栄・新劇の思想』について

清水博司（祖父江昭二著作集刊行委員会代表）

213

# 戦時下の弾圧問題の地平と広がり——和田洋一『灰色のユーモア——私の昭和史』によせて

望田幸男（ドイツ近現代史）

222

永井潔著『真理について』（稲沢潤子・作家）

226

永見瑞木著『コンドルセとへ光』の世紀——科学から政治へ（岩佐 茂・社会哲学）

229

早瀬晋三著『グローバル化する靖国問題——東南アジアからの問い』（佐々木隆爾・日本近現代史）

233

〈私の読んだ本〉小貫雅男・伊藤恵子著『菜園家族レボリューション——日本国憲法、究極の具現化』（尾関周二・環境哲学）

237

## 観測点

郷土の誇り、相沢良を語りついで 堀 幸光（市民連合あおもり世話人）

19

日大アメフト問題から見えること 和泉民郎（スポーツジャーナリスト）

21

米のイラン核合意から離脱 岡田則男（ジャーナリスト）

25

【資料】 辺野古基地建設めぐる新問題（沖縄之紙社説）

グラビア 2018年モスル——恐怖や悲しみと向き合いながら 安田菜津紀（フォトジャーナリスト） 4

● 読者のひろば 17 ● グラビア解説 239 ● 編集後記 240

# アメリカ映画の「暴力」性

—時代を映す「鏡」としてのハリウッド映画



岩本裕子

いわもと・ひろこ 1955年生まれ、アメリカ黒人女性史、浦和大学こども学部教授。著書に『物語アメリカ黒人女性史（1619―2013）』『スクリーンに見る黒人女性』語り継ぐ黒人女性』など。

## 1. はじめに

『季論21』編集委員会から「近年のアメリカ映画はいとも簡単に人を殺している。そこにアメリカ戦後史がいろいろな意味で反映しているのではないか」という問題提起が、筆者に出された。本稿では単に「殺人」に限定せず、「暴力」を描くアメリカ映画という視点から問題提起に応じてみたい。

アメリカ社会における「暴力」は、アメリカ研究者にとって重要な研究テーマであり続け、すでに複数の学会誌で特集も組まれたことがある。二〇〇六年三月には

『アメリカ研究』第40号（\*1）で、六本の論文掲載によって議論された。七年後の二〇一三年に『アメリカ史研究』第36号（\*2）でも特集され、「インディアン戦争」から「対テロ戦争」まで六本の論考で議論された。「暴力」がテーマとなった講演も続いている（\*3）。

アメリカ映画で描かれる「暴力」を、本稿ではその歴史から紐解きながら、今日の世界情勢まで解釈してみた。

## 2. 善悪が明確なハリウッド映画

テレビ全盛になる以前、映画が娯楽の中心であった一

九四〇年代から五〇年代のハリウッド映画（厳密にはアメリカ映画と同義ではない \*4）は、西部劇がドル箱のひとつだった。中でもジョン・フォード監督が、ジョン・ウェインを主演に起用した『駅馬車』(Stagecoach:1939)以来、西部劇の悪者として先住民(\*5)が描かれた。西へ向かうときに、立ちはだかる「自然」と一体になって、白人たちにとっての恐怖の対象、邪魔者としての存在として先住民は長く位置づけられていた。

一九六〇年代に入ると、公民権運動から発生した単に黒人に限らない、先住民を含む様々なマイノリティの立場を重視する動きが出て、映画界も例外ではなくなつた。西部劇における先住民の描き方に問題があるとき、単なる悪者として利用できなくなり、結果的に善悪がはっきりする西部劇が存在できず、ハリウッドでは西部劇の製作を中止せざるをえなかった。

チェロキー部族の血を受け継ぐ俳優ケヴィン・コスナーが監督、主演した『ダンス・ウィズ・ウルブス』(Dances with Wolves:1990)が製作される一九九〇年まで、長く西部劇はハリウッド映画界から製作対象外としてきた。視点を異にした一部の例外を除いて、先住民を悪者にする西部劇は作られなくなった。先住民が大平原から追われていく過程を映画にし、先住民の権利や環境保護を訴えた『ダンス』が大きな分水嶺となって、西部劇の

様相は変わった。

ヨーロッパ映画と異なり、善悪を明確にして勧善懲悪を使命とするアメリカ映画は、「悪」の存在を欠かせない。先住民の代わりにハリウッド映画が新たに「敵」に設定したのは、冷戦時代のソビエト連邦、ソ連邦崩壊以降はチェチェン・マフィアなどの「テロリスト」だったが、二〇〇一年「九月十一日」以降は、現実の悲劇のためにその深刻さを増したのだった。

「近年のアメリカ映画はいとも簡単に人を殺している」という印象を持たれる昨今のハリウッド映画に至るまでの歴史を俯瞰しておきたい(\*6)。一八九五年十二月二八日、フランスのリュミエール兄弟が映写式シネマグラフをバリのグラン・カフェで初上映したが、映画の始まりだった。二十世紀初頭、合衆国で本格的に映画作りが始まった頃の製作場所は、ニューヨーク州イサカの町だった。

厳しい特許管理が行われるニューヨークは、映画人にとって決して居心地のよい場所ではなく、規制からの逃避が主な理由で移動することになった。移動地は、一年中好天に恵まれる天候条件のよい西海岸が選ばれた。一九一一年にグリフィス監督がバイオグラフィ社の俳優を連れてロケに来たのが最初だと言われている。これがハリウッドの始まりとなった。

二十世紀に入って急速に発展した映画産業の中心はフランス映画で、一九一五年には世界市場の九〇%を占めたと言われる。ところが第一次世界大戦で映画製作を中止したため、一九一九年にはアメリカ映画が世界の八五%を製作するまでになった。この時期は画像だけが動き、一部は説明が文字で入るといふ「サイレント映画」の時代だった。ヨーロッパの非英語圏からの移民が合衆国に大量に入ってきた時代と重なり、英語を話せない貧しい移民にとって貴重な娯楽となった。

こうした時代の申し子のような存在が、ロンドンから移住したチャールズ・チャップリンだった。一九一三年末、二四歳のときに合衆国でその才能を評価されて以降、チャップリンはアメリカ映画と共にあった。アメリカ映画の代名詞のようなチャップリンがハリウッドを追われ、ヨーロッパへ追放されたのは一九五〇年代、ハリウッドで「赤狩り」(マッカーシイズム)の嵐が吹き荒れた頃だった。「アメリカに忠誠を誓わず、アメリカ国籍をとらず、アメリカの敵である共産主義に貢献した」とされたチャップリンが名誉復権できたのは、二十年後の一九七二年、ハリウッドはチャップリンをアカデミー賞特別賞のために招いたのだった。

「赤狩り」はハリウッド映画人にとって、長く消えないトラウマとなった。マーチン・スコセッシ監督とロバー

ト・デ・ニーロという名コンビで、赤狩りを正面から描いた映画『真実の瞬間』(Guilty by Suspicion:1991)が作られた。時代批判を込めて、人間としての良心と尊厳を守り抜いた映画人を誇らしく描き、社会的に抹殺されることを覚悟で、真実の生き方を貫く姿が感動的な映画だった。

この二人の映画人がプレゼンターとなったのは、第七一回アカデミー授賞式(一九九八年)名誉賞であった。受賞者は、赤狩り時代に内通者として仲間を裏切ったエリア・カザン監督だった。会場は立ち上がりつつ称賛する人と、腕組みをして拍手しようとしぬ人に分かれた。ハリウッド映画人は、様々な主義主張の元、政治的な立場を明確にすることを当然とし、社会的な出来事にも敏感に反応した。

戦争をめぐる反応は明確だったが、次節で論じる。ここでは他の事例を二つ紹介する。丁度五十年前、一九六八年のアカデミー賞授賞式は四月八日開催予定だった。ところが四月四日にメンフィスでキング牧師が暗殺され、その葬儀に配慮して開催日を二日遅らせ十日に開催したのだった。

五年後の一九七三年、『ゴッドファーザー』(Godfather: 1972)がアカデミー賞の話題を独占した。主演俳優マーロン・ブランドは、かねてより先住民問題に強い関心を

もち、ハリウッド映画で先住民が悪役として描かれてきたことに抗議した。最優秀主演男優賞を獲得しながらも会場には現れず、その代理者として先住民女性が壇上に出て、先住民差別に対する彼のメッセージを読み上げ、賞を辞退する意向を示した逸話は有名である（\*7）。

### 3. 現実の暴力を見せる戦争映画

戦争は暴力そのものだが、一九五〇年代までのハリウッドが描いた戦争映画は、国威発揚を目的として戦争を美化するもので、第二次世界大戦を扱うものが多かった。反戦映画が主流となるのは、一九七五年サイゴン（現在のホーチミン市）陥落によるベトナム戦争敗戦以降だった。『ディア・ハンター』（The Deer Hunter:1975）、『地獄の黙示録』（Apocalypse Now:1979）、『プラトーン』（Platoon:1986）など枚挙にいとまがない。

西部劇でも戦争映画でも、殺戮場面は現実とはほど遠い美化されたものでしかなく、低年齢の子どもが見るに堪える表現に留まっていた。テレビゲーム世代以降の子どもたちは、ゲームの中で人が死んでも「リセット」できると思いこむ。再生できないかけがえない「人命」という意識が薄れていた一九八〇年代を受けて、戦争の現実を子どもたちに伝えようという映画が登場した。ステ

イーヴン・スピルバーグ監督の『プライベートライアン』（Saving Private Ryan:1998）である。米国防省が定めた「唯一の生存者規定」（Sole Survivor Policy）に基づく特命を受けた部隊が、ノルマンディー地方に降下した落下傘部隊ライアン二等兵（Private Ryan）救出に向かう物語である。実在した兄弟の逸話に基づいている。

一九四四年六月ナチスドイツ優勢の欧州戦線で、戦局を一転させた「ノルマンディー上陸作戦」を描いた作品である。すでに過去にこの作戦を美化する映画は複数作られていた。英仏海峡を越えて北フランスのノルマンディー四カ所に侵攻する連合軍のうち「オマハ・ビーチ」と暗号で呼ばれた海岸に米軍が上陸した。二〇分は続く冒頭の戦闘場面は言葉を失う。決して誇張ではなく、あれこそ戦争の現実で、戦争映画のあり方を変えることになった。オマハ・ビーチでは上陸部隊の約半数が戦死したという凄惨な作戦で、スピルバーグ監督はその現実を丹念に伝えたのだ。私は観衆を舞台上に上げ、実戦を見たことがない子ども達とともに、オマハ・ビーチの丘を駆け上がってほしかった（\*8）と語った。

『戦争の世紀』と呼ばれた二〇世紀の末に、戦争の現実を適確に伝えて、反戦を訴える映画がさらにもう一本作られた。二一世紀初年に公開された『スターリングラード』（Enemy at the Gates:2001）<sup>6)</sup>、米独英愛四カ国合作の

戦争映画である。第二次世界大戦時にソ連の狙撃兵として活躍、「伝説のスナイパー」として実在したヴァシリ・ザイツェフを主人公に、当時のスターリンググラード（現ヴォルゴグラード）における激戦「スターリンググラード攻防戦」（一九四二年六月～一九四三年二月）を描いたフィクションである。史上最大の市街戦となり、動員兵力、犠牲者、経済損失も莫大な規模に拡大し、独軍の大敗北となった。

冒頭のヴォルガ川を渡る戦闘場面は、『プライベート・ライアン』の冒頭部分に匹敵する地獄絵図となっていた。「肉弾特攻作戦」と呼ばれる戦術で、人海戦術どころか人命をゴミのように捨てる「塵芥戦術」となっていた。戦争の現実から目を背けることなく直視することで、「二度と戦争を起こさない」という決意を後世の人々に促した。これら映画二本は、ベトナム戦争を契機に製作された反戦映画とは立場を異にしつつ、次世代に戦争の無意味さを訴える点では共通していた。改正できないはずの憲法を書き換えて「戦争できる国」にしようとする最高指導者を抱える我が国の若者たちにも、この二本を直視して、戦争がいかなるものかを熟考してほしい（\*9）。

#### 4. 銃社会アメリカを告発したドキュメンタリー

戦争に武器は必需品で、アイゼンハワー大統領が一九

六一年一月二十日の告別演説で警告した「軍産複合体」の産業界は、武器製造や武器輸出によって成り立ってきた。戦時体制ではない民間社会においても武器が公然と存在するアメリカ社会は、「銃社会」(gun culture)と呼ばれる。一七八八年に発効した合衆国憲法は同時に定められた「権利章典」とも呼ばれる修正十条分の二番目、憲法修正第二条によって「人民が武装する権利」が保障された。

二〇〇三年三月、イラク戦争開始三日後に開催された第七五回アカデミー賞授賞式において、最優秀長編ドキュメンタリー賞を受賞したマイケル・ムーア監督は、受賞スピーチにおいて「恥を知れ、ブッシュ」(Shame on you, Mr. Bush)を捨てぜりふにステージを下りた。国連安保理決議を待たずに「イラク戦争」に突き進んだW・ブッシュ政権は、四月九日のバグダッド陥落時点で、戦争の大義名分であったはずの大量破壊兵器を見つけないことができなかった。

アカデミー賞授賞式において「戦争反対」を叫んだムーア監督はW・ブッシュのことを「イカサマ (Fictitious) 選挙で決まったイカサマの大統領」と断言した。授賞式後の記者会見でも「イラク戦争」のことを「ブッシュとブッシュの石油屋仲間のため」と公言してはばからなかった。ムーア監督の受賞作品は、誰もが自由に銃を購入し

て犯罪に走る可能性を持つ銃社会であるアメリカ合衆国を告発しようという意図の『ポウリング・フォー・コロンバイン』だった。

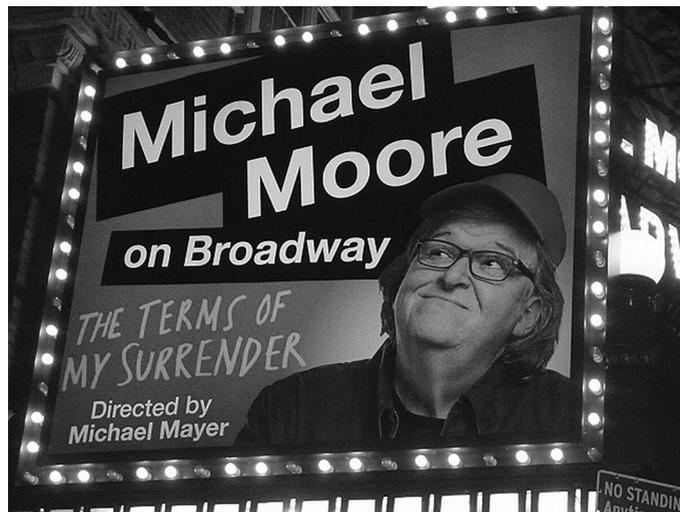
一九九九年コロラド州ラドデンバー郊外にあり、兵器製造会社ロッキード社が工場を持つトリルトンという町にあるコロンバイン高校で起きた二人の男子高校生による銃乱射事件を扱ったドキュメンタリーである。犯人の高校生は事件を起こした四月二十日の朝六時からボーリングをしていたという。「トレンチコート・マフィア」と呼ばれるグループの一員だった犯人二人は、事件当日黒いトレンチコートを来て高校に現れた(\*10)。

この事件からすでに二十年経った現在、アメリカ社会で銃による事件が途絶えることがない。家庭で小さい子どもの銃暴発事件も繰り返し返されている。「自分のことは自分で守る」アメリカ人と言われて、自己防衛のための銃携帯が限り根絶できないのだろうか。

このあと、ジョージ・W・ブッシュ大統領を批判した映画「華氏911」も作って、世界的ヒットとなった。社会問題をテーマにドキュメンタリー映画を作り続けたムーア監督が、二〇一七年八月に、ブロードウェイのベラスコ劇場 (Belasco Theater) でワンマンショーでデビューした。タイトルは「The Terms of My Surrender」「私の降伏条件」だった。トランプ大統領批判が大きなテ-

マとなっていた。(写真、撮影・筆者)

舞台監督を担当したメイヤー氏は、五月の記者会見で「世界が今必要としているのは、マイケル・ムーアがブロードウェイの舞台に立ち、芝居でしか見ることのできない対話を通して、面白いストーリーと扇情的な政治的見解を観客と共有することだ」と発言した。「最終日ま



でに十万人がショーを観る。それぞれがここの私の話を十人に伝えると、ショーを通じて百万人にリーチしたことになる」とムーア監督は語った。「毎晩舞台が終わるとき、魂が少し癒

され、絶望が減るような気がして、問題を解決できると少し前向きになる」とムーア監督は話したという。彼が二時間半の舞台で語ったこと、最後のアンコール場面で、軽やかに歌いながらダンスをしていたのは、きっと会場に集った我々観客からの反応で絶望を少し減らすことができたのだろうと思う（\*11）。

## 5. セクハラ・パワハラという「暴力」#Me Too

ハリウッドはアメリカ社会の向かう方向を先取りし、常に社会を牽引してきた。ハリウッド俳優は民主党支持者が多く、大統領選挙のたびに民主党候補を応援してきた。前述したようにイラク戦争反対の立場を表明し、共和党ブッシュ（息子）大統領批判を繰り返した第七回アカデミー賞授賞式（二〇〇三年）、最優秀作品賞のプレゼンターとしてミシェル・オバマがホワイトハウスから登場した第八回アカデミー賞授賞式（二〇一三年 \*12）など逸話は絶えない。

このハリウッドで二〇一七年秋に、いわゆる「セクハラ」(sexual harassment) 告発が起った。行為自体は決して初めてのことでないのだが、「告発」が周知されること自体が新しいことだった。二〇一八年五月現在、日本

でも前財務事務次官がセクハラ問題で処分され、問題は我々の足元まで来ている。被害者に告発の勇気を与えたのは、二〇一七年秋にハリウッド女優たちが、長い間の「沈黙」を破って声を上げ、告発者を孤立させず、「自分もそうだ」と賛同するようになった運動があるだろう。ネット空間では#MeToo運動となっている。その運動を支える男優たちが、セクハラを「もう終わりにしよう」(Time's up) と支援も続けている。

世界中にこの運動が周知されたのは、二〇一八年一月七日に開催されたゴールデン・グローブ賞授賞式だった。参加した女優たちは皆黒いドレスを身にまとい、男優たちはTime's up. のバッジをつけて集った。同賞が設定する「セシル・B・デミル生涯功労賞」受賞者によって#MeToo運動が、世界へ発信されたのだった。

まず功績賞の説明を先にしておく。セシル・B・デミルとは映画監督で、出エジプトを描いた『十戒』（一九五六年）が彼の遺作となった。彼の名を冠した賞は、長年にわたって映画界に貢献した人物に贈られ、ハリウッド外国人記者クラブが決定してきた。

トランプ大統領就任直前に開催された二〇一七年一月、同賞受賞者のメリル・ストリープがトランプを非難し「他人への侮辱は、さらなる侮辱を呼ぶ。暴力は暴力を扇動。権力者が立場を利用して他人をいたぶると、そ

れは私たち全員の敗北」と訴えた後に「権力を監視し、責任を果たさせるよう」報道機関に求めて、会場に集った映画人たちには、ハリウッドが報道機関を支えなくてはならないと強調したのだった。ハリウッド外国人記者クラブ、つまり「ハリウッド」「外国人」「報道」は、就任以来トランプ大統領が忌み嫌い、攻撃対象としてきた存在である。メリル・ストリープは、ハリウッドを代表する映画人として、毅然とした態度で発言したのだった。

この勇氣ある発言から一年、二〇一八年の「セシル・B・デミル生涯功労賞」を受賞したのは、バラク・オバマを大統領にしたと評価された黒人女性オプラ・ウィンfrey（\*13）だった。メリル・ストリープ同様、世界中に勇氣を与える受賞スピーチを行い、#MeToo運動を世界に発信したのだった。

アメリカ社会で最初に「セクハラ」の表現が使われたのは一九七〇年代だった。夏期休暇のアルバイト中に性的嫌がらせを受けた女子大生が、自分たちに起こったことをsexual harassmentと表現したのが始まりだとされている。グロリア・スタイナム（Gloria Steinem）が一九七二年に創刊した女性雑誌『ミス』（Ms. magazine）が、この女子大生の経験を巻頭特集したことで注目を集め、セクハラ概念が明確化され、性差別が理論化、法制化されていった（\*14）。

現在ではセクハラ問題の第一人者として知られる弁護士で法学者のキャサリン・マッキノン（Catherine MacKinnon:1946-）が中心となり、法規制を求める運動、女性の人権を侵害し性犯罪を助長するものとしてポルノグラフィを規制する運動を行った。マッキノンはフェミニズム思想史上、最大の貢献をしてきた法学者と評価される。

アメリカ社会で「セクハラ」概念が定着した契機は、一九九一年の黒人女性アニタ・ヒルによる告発だった。現クラレンス・トーマス連邦最高裁判事が任命を受ける直前のことだった。同年十月全米の耳目を集めた公聴会が行われた。九人で構成される連邦最高裁判事唯一の黒人ポストは当時、ブラウン判決勝利で有名な弁護士サーグッド・マーシャルだった。彼の引退後のポストをトーマスが獲得する直前のことだった。

一九九一年時点オクラホマ大学法学部教授だったアニタ・ヒルは、トーマス元雇用機会均等委員会委員長の前で部下として働いていたときにセクハラを受けたことを告発した。ヒルの行動をめぐって黒人社会では「内部告発派」と「人種擁護派」に二分された（\*15）人種を問わず、女性の権利が確立していなかった当時、アメリカ社会全体で、単なるスキャンダルを超えた議論に発展した。あれから二七年経ったアメリカ社会が#MeToo

運動を展開できるようになっていることは、運動の先達たちには喜ばしいことに違いない。

二次史料のタイトル通りまさに「後日談」でしかないが、八年前の二〇一〇年に、トーマス判事夫人（白人からアニタにかかった留守番電話（ヒルに対して夫への謝罪を要求）をめぐる報道が出て、記事は以下のように結ばれた。「ヒル女史の『勇氣』があったからこそ、『セクハラは犯罪』という社会常識が、アメリカだけでなく世界の多くの国で確立したのは間違いない」\*16 孤軍奮闘したアニタ・ヒル世代から、オプラに率いられた#MeToo運動に発展した現在、国も人種も超えて賢明な判断が個々人に委ねられている。

## 6. ハリウッド映画の「使命」変貌

近年のアメリカ映画が「いとも簡単に人を殺している」印象を観客に与えるのはなぜだろう。二〇世紀初頭、セント硬貨（ニッケル \*17）を握って映画館に通う英語を母語としない新移民のために、「ハッピーエンディング」こそが使命だったハリウッド映画が、一九九〇年代後半頃から結末に変化が出てきたことに通じるだろうか。

「アメリカン・ドリーム」を描くこともハリウッド映画の大切なもう一つの使命だった。アメリカ合衆国に移民

してきた人々にとって、夢は叶わなければならぬ！  
“Dreams come true.” は、「ディズニー映画の「使命」になる前から、ハリウッド映画に欠かせないテーマだった。

二〇一六年に話題を集めた『ラ・ラ・ランド』(La La Land:2016) は、その使命を守り、主人公たちは立派に夢を実現したが、残念ながら「ハッピー・エンディング」ではなかった。やはり二一世紀の映画だった。

アカデミー賞全二三部門のうち、『ラ・ラ・ランド』は、『タイタニック』(Titanic:1997)と並ぶ史上最多の一四候補となり、主演女優賞など六つの最優秀賞を受賞した。二一世紀の映画で虚構でありながら、なぜ「ハッピー・エンディング」に仕上がったのか。劇場で観た後「デジャヴュ」と「オマージュ」という仏語を思い浮かべた筆者は、ハリウッド映画に「ハッピー・エンディング」は似合わなくなったことを実感した(\*18)。

全くの虚構から、史実に基づいた映画（本稿では『プライベート・ライアン』『スターリングラード』など）まで、ハリウッド映画はその制作者も数世代を越えるようになり、あり方は変容せざるを得ない。永遠のテーマであるはずの「アメリカン・ドリーム」も「ハッピーエンディング」も形を変えていく。さらに建国初期から武装（銃携帯）が合衆国憲法修正第二条で保障されたアメリカ社

会では、「いとも簡単に人を殺している」印象を与えるのかもしれない。

## 7. おわりに

アメリカ映画が世界の映画界を牽引するようになってほぼ百年が過ぎた。その歴史を俯瞰してきて、すでに明らかかなように、変化の分岐点は、編集委員会から提示された「戦後」ではない。

憲法に守られて第二次世界大戦を二十世紀最後の戦争とした日本とは異なり、合衆国は大戦以降、冷戦の名の元にアジア二カ所、朝鮮半島とベトナムでの戦争、さらに湾岸戦争、イラク戦争と戦地に若者を送り続けてきた。十八世紀の独立戦争以来、南北戦争を別にして、第二次世界大戦まで敗戦を知らなかった合衆国が、朝鮮戦争で「休戦」、ベトナム戦争で敗戦を経験した。

ベトナム戦争では復員兵のみならず、銃後のアメリカ社会も病んでしまった。アメリカ映画の転機とさえいえば、ベトナム戦争、さらに同時期に国内で起こった人種、民族、性別をめぐる「市民」運動こそが大きな契機となった。アメリカ社会を省みる手段として、ハリウッド映画人自身が、自国が起こした戦争に向き合い、自国を率いる政治家たちを監視する。メリル・ストリープの言葉を

借りれば、「権力を監視し、責任を果たさせるよう」ハリウッドが報道機関を支えていくのだろう。

本稿では「殺人」に限定せず、銃社会、パワハラ・セクハラなどの広域「暴力」を手がかりに、アメリカ映画とハリウッド映画人を検討してきた。紙幅の都合で、「暴力」でも絶望的な「核兵器」をめぐる映画表現に言及できなかった。唯一の被爆国である日本の視点から見ると、不愉快な映画表現は多い(\*19)。ヒロシマとナガサキに原爆投下したアメリカ合衆国が、その被害の深刻さに向き合っていないことは遺憾である。

映画は時代を表現する鏡である。ハリウッド映画人たちは、それを具現する存在でもある。映画のあり方を検討することは、アメリカ社会や世界のあり方を確認することにも通じる。「権力を監視」する一助としてアメリカ映画を読み解くことは、新たな視点を得る手段にもなると確信する。

\*1 日本アメリカ学会誌『アメリカ研究』第四〇号(二〇〇六年三月)特集「暴力」

\*2 日本アメリカ史学会誌『アメリカ史研究』第三六号(二〇〇三年九月)特集「暴力」編集委員会「特集によせて」にその意図が詳しい。

\*3 一例として以下がある。広島平和研究所HP「研究フォー

ラム二〇一七年五月三十日「連綿と受け継がれる暴力と生きる―現代の米国南部における歴史、記憶、トラウマ」講師ナン・エリザベス・ウッドラフ（米国ペンシルベニア州立大学歴史学部教授）筆者の仕事としては「反戦・反核」をテーマに執筆した拙著『スクリーンに投影されるアメリカ「九月十一日」以降のアメリカを考える』（メタ・ブレーン、二〇〇三年、以下『投影』と略記）がある。「暴力」でも特にDVに着目した拙稿は以下である。拙稿「黒人社会におけるドメスティック・バイオレンス…文学とブルースと映画を手がかりに」立教大学アメリカ研究所『立教アメリカンスタディーズ』第二八号、二〇〇六年三月、一〇三―一二六頁。

\*4 一九七〇年代には巨大化まさにメジャー化したハリウッドは問題を多く産むようになり、そのことに異議申し立てした俳優がいた。社会派映画の監督でもあるロバート・レッドフォードである。その出世作『明日に向かって撃て』（Butch Cassidy and the Sundance Kid:1969）の出演料が、ユタ州コロラド山中に牧場を購入し、映画の役名だったサンダンスと名付けた。一九八〇年にここにサンダンス・インスティテュートという映画学校を設立し、若い映画人の養成を始めた。一九八四年から、サンダンス・フィルム・フェスティバルを開催して、才能あるインディペンデント（独立独立）作品の発表の場を提供したのだった。すでに三五年が過ぎ、もはやマナーではなくハリウッドにも競合するメジャーの一つとなっている。

\*5 本稿で「先住民」と呼ぶ場合、全米五〇州の内四八州に住む人々を意味する。本来合衆国の先住民という場合、アラソカ州在住のかつて「エスキモー」と呼ばれ、「イヌイット」と呼び名を変えた先住民を含むべきである。さらにハワイ州の先住民、すなわちポリネシアから七世紀に移住してきた人々、

現在「ハワイアン」と呼ばれる人々も当然含まなければならぬ。

\*6 映画を題材にアメリカ合衆国の歴史と文化を論じる目的で出版した以下の拙著では、アメリカ映画の成立過程、その性格を論じることは必須事項だった。本節は以下を加筆修正した。「第三部秋収穫の季節に豊かな州をまわろう第二章ハリウッド、映画の都の光と影」拙著『スクリーンで旅するアメリカ』（メタ・ブレーン、一九九八年）一三五―一四二頁。

\*7 40th Academy Awards.  
[http://en.wikipedia.org/wiki/40th\\_Academy\\_Awards](http://en.wikipedia.org/wiki/40th_Academy_Awards)  
(1968) , 45th Academy Awards.  
[http://en.wikipedia.org/wiki/45th\\_Academy\\_Awards](http://en.wikipedia.org/wiki/45th_Academy_Awards)  
(1973) . 『トッツァー』に関しては、以下の拙稿を参照されたい。拙著『投影』八一頁脚注一六、一三七―一四六頁。

\*8 映画『プライベート・ライアン』パンフレット

\*9 僥越ながら筆者担当講義「歴史入門」では、毎年六月六日目前には『プライベート・ライアン』冒頭場面の一部を見せる。生き残ったライアン二等兵が子や孫と一緒にオマハビーチを訪れ戦死者の墓参をする場面から、戦闘場面の十分弱（これで半々）を見せている。兵士の手足が吹き飛び、内臓が飛び出た兵士が「ママ」と叫ぶ場面で一時停止させ、目を反らしそね凍り付いた表情の学生たちに向かって「これが戦争だね。二度と戦争してはいけないよね。自分の一票を賢明に判断して使って！」と講義を結んでいる。講義を終えても、学生たちは衝撃の余り席を立てずにいるのだが。

\*10 この下りの初出は以下で、同年に出版された拙著でも加筆修正して再録した。拙稿「ボウリング・フォー・コロンバインの風景―マイケル・ムーア監督作品を手がかりに」猿谷要編『アメリカよ!』（弘文堂、二〇〇三年）「イラク戦争を

見ずえるー『ボウリング・フォー・コロンバイン』』拙著『投  
影』三八〜四四頁。

- \*11 この情報は以下拙稿を通して最初に発信した。浦和大学H  
P 映画コラム「The Terms of My Surrender」私の降伏条件」  
遅くなったけど、まだ話していい？ つきあってくれる？」二  
〇一七年八月二十七日掲載

<http://www.urawa.ac.jp/news/33411.html>

筆者が鑑賞した八月一七日夜の観客の政治意識はすごく  
高く、ムーア監督の一言一言に、本当に誠実に反応していた。  
もちろん筆者も、怒りに賛同したときには大いに拍手し、ア  
ンコールではスタンディングオベーションで賛辞を伝えた。  
日米問わず、絶望的な政治状況の中でも、民衆は怒って立ち  
上がることを忘れていないことを自覚して、勇気をもたらった  
夜でもあった。

- \*12 「アカデミー賞作品賞プレゼンターはファーストレディ」拙  
著『物語アメリカ黒人女性史(1619-2013) 絶望から希望へ』  
(明石書店、二〇一三年、以下『物語』と略記)二八九〜二九  
〇頁。

- \*13 拙稿「オブラ・ウィンフレイー 困難を克服する様子こそを  
示す」『スクリーンに見る黒人女性』(メタ・ブレン、一九九  
九年)二四九〜二五〇頁。；拙稿「世論を動かした重要人物ー  
オブラ・ウィンフレイーの影響力」『語り継ぐ黒人女性』シシエ  
ル・オバマから「コンセンサス」(メタ・ブレン、二〇一〇年)  
三二〜四二頁。；拙稿「『バラックの救世主』オブラ・ウィンフ  
レイ」『物語』二七〜二七四頁。

- \*14 "A Brief History of Sexual Harassment", by Gloria Steinem  
[http://www.oprah.com/inspiration/a-brief-history-of-](http://www.oprah.com/inspiration/a-brief-history-of-sexual-harassment-by-gloria-steinem_1)

- \*15 拙稿「アフターマティヴ・アクション以降、分化した黒人

社会」『投影』九二〜九三頁；「用語『セクハラ』を定着させた  
アニタ・ヒル」『物語』二二八〜二二九頁；アニタ・ヒルを主人  
公にしたHBO映画『アニタ』世紀のセクハラ事件』(Confir-  
mation)が二〇一六年に製作され、同年エミー賞限定シリ  
ズ/テレビ部門作品賞候補にもなった。

- \*16 冷泉彰彦「アニタ・ヒル事件、一九年後の後日談とは？」  
『ニエズウィーク日本版』二〇一〇年一〇月二日  
[https://www.newswEEKjapan.jp/raizei/2010/10/post-213.](https://www.newswEEKjapan.jp/raizei/2010/10/post-213.php)

php

- \*17 一九一〇年代のアメリカ映画業界の裏側を描いた映画『ニ  
ッケル・オデオン』(Nickel Odeon:1976)は、サイレント映  
画にオマージュを捧げた作品となっている。題名の「ニッケル  
・オデオン」とは、アメリカ最初の映画館の名称で、ニッケ  
ル(五セント硬貨)一個で入れる殿堂の意味である。一九〇五  
年十一月にピッツバーグに初めてこの名の映画館が開設して  
大成功した。収容人数は二百人。こけら落とし上映作品は  
ポーター監督『大列車強盗』(The Great Train Robbery:1903)  
であった。『大列車強盗』を制作したのはエジソン社だった。  
(『世界大百科事典第二版』から一部引用し修正)

- \*18 浦和大学HP映画コラム拙稿「第八九回アカデミー賞授賞  
式分析1:『ラ・ラ・ランド』」<http://www.urawa.ac.jp/news/31633.html>

- \*19 拙稿「核廃絶への遠い道のり:『マンハッタン計画』から『ト  
ータル・フィアーズ』まで」『投影』四五〜五四頁。核兵器の恐  
怖を認識していない映画表現に関しては、本稿最後の項目「映  
画のなかの核兵器」『トータル・フィアーズ』の意味するもの」  
に詳しい。